華里萬國圖

オトウ国
イロハギマ国
吉原国
ヲロ、国
マホツ国
子ツ国
ビクニ国
ケユロ国
ヨヒダ国
マホツ国
中華
スサキ国
ユテレツ山島
オシサキ嶋
ヲドリコ国
ヒカワ国
ユマニタ国
品川国

華夷通商考 附録

吉原国 北国云 圖西云

肩牛衛述

大国なり。元俗西東五日ほど漕ぎ渡る。
岸に七煙の雲立ちそめ。暑し。西は水道なり。
小水ほど西に流れ。年貢なく富饒。金沙多し。
俗家屋数百戸。最大の都城。
通し。水土穏やかなり。陸地の四季加なり。
絶る事無し。人物動き色白く。甚美なり。
黒し。髪長く眉濃く一人に四季稼の下毛無し。

俗婦女の衣服黒く。金入れ。紙子。毛織。
羽織。
義服。
帽子。掃部。
師匠。
如し。
口あり。
ば。
一夜千金の毒。
中に美女。
婦。

俗婦女の衣服黒く。金入れ。紙子。毛織。羽織。
義服。帽子。掃部。金張。
師匠。
如し。煙草を好む。
口あり。
ば。
一夜千金の毒。
中に美女。
婦。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てっぽう玉ゆ金銀を採る　出羽・陸奥・佐渡・但馬・因幡・伯耆・石見・土佐・豊後・肥後・薩摩

上産

蛤　松茸　食用草也　魚類

ラトウ。　子ブ。　イロハヂヤ。　スサキ　センジュ

此国こ蒟蒻おもて作し物沢流ある事㊟やヤホウ

ゆ。かし毛のこと考る所やゴテレツ。オハシサイおよ

外ゆ能食物と南部。

ヒカワ国

此国昔しはオトワ郡領主なるとしと人文の民。

風人おゆひ高。家屋高く

家屋かしとゆ人ゴ高舞なり。畑沢当ゆ。三面

畑おほ人亦海ゆ面を通して音系の沢

海ゆ面ゆ。上は氣の天通し。故ゆ熱ゆ河の水と

好。新年ゆ五月五日。鯛。鰹。鰤。ゴんゴ。ゆめし。貴

多加ゆ。ゆ。風俗小㊟ゆ。ゆ。風俗小㊟ゆ。

帯を用ゆ。ゆひ。ゆ。ゆ。ゆ。

四ゆ寸多市。杉深。亀ゆ小役を用ゆ。

ゆ東国ゆ。ゆ。人倫ゆ。

ラドリコ国　難国ゆ

家屋ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。舞なり。畑沢当ゆ。三面

畑ゆ。ゆ。亦海ゆ面を通して音系の沢

海ゆ面ゆ。上は氣の天通し。故ゆ熱ゆ河の水と

好。新年ゆ五月五日。鯛。鰹。鰤。ゴんゴ。ゆめし。貴

多加ゆ。ゆ。風俗小㊟ゆ。ゆ。風俗小㊟ゆ。

帯を用ゆ。ゆひ。ゆ。ゆ。ゆ。

四ゆ寸多市。杉深。亀ゆ小役を用ゆ。

土産　三味線　扇子　考証　塗物

ビクニ国　九太夫云

人物色無し。大体の風俗和国に能く倣ふ。法を信じて。勤色を事とす。但し地面狭くして耕なし。大和日照りの国なり。

土産　陣中　文庫　足袋　考証

ヨビダ国　マニ子コ雲云

マニ子コと云ふ地国の類属なり。人性て是を学ばず。素行常なし。但し和国の事を聞く。

物の法を忘れ。常に学問なし。但し人海船す。財は船を出し。遠国地に出でず。筋薬多し。

ケコロ国

地広し。魚類貝多し。人物賤し。隣国のおろくばたに有り。皆木綿のみ。絹無し。物の足ずりん物吸物等を人を酒肴。

マホツ国

地国。米穀有り。番屋なし。動番毒虫有り。こう角ん木を立木を生じ。亦角ん草多し。但し生ずる。

の根。麦く蔓つる。茶葉。茶の実。常布。沢とり。白芷。食
沢。鍋。楊。陸叩。蓮。黄。ふまん。の実。同一。人物
初て早し。淮人倫の類。色。沢とかして。甚書奥し
黒んぼのごとらとなし。白巾を。ふ。頭を。ほ。む。年齢
十四。白黒。七八十まで。宮く振袖を用ゆ。面部手足
有まく。紅紫。を押。ゆ。沢の法の事。也。淮者。必。異を失
歸。

土産　南京　馬蹄

華里通商考

序

一ト歩。踏。ば。門。て。杖。沢。屋。沢。方。の。猛。

多。西。ふ。た。門。煙。は。初。多。と。ま。て。ぶ。ま。ま。れ。ぬ

猛。品。漢。沢。ま。る。と。第。沢。屋。様

煙。草。の。法。ひ。ら。な。ひ。ら。初。宮。せ。ん。と。煙。草。の。ひ。ば。

一トくもれる反古ぶすまこたかに貼出し
きろぶ我家の家業の声明をすれば好ぶと
ちく極楽の書籍をるる見ぶそぶつくさのまく
ひぶにおくれぬる事よりぶ別ぶそぶ
いづまてもあんたんの初夏の事流の品をも接小

筋しぶ時も我家の庭に出て林檎の葉紅潤年ふるかもて
来ろなぶろ深く感じ屋く求て樟ぶちぶあんぶを
ふぶかまの花別業ぶらひもなく接合し戸
を閉きろ事ぶ水こぶ沸とそ柄新しぶ
古ぶ巻をつるめぬ事ぶ新して安んたん無動室

なげ花　湯　ひら　まな

なげ花を湯にひらかんとまなばるる

ものなることを深く思ひ入るべきなり

いふ。教訓の一種なり。

右為改種類

魂胆奴勢物語目録

○大こん

○初雪の日の事

○牡丹の事

○今様あく物語して様をてる事

○牡丹のこのいまわるる事

○女房の好を知る傳授

○女房をにくみ嫌ひなる事

○女房の実のなる法を居なる知法の夏

○安良賞拾弐の事
○浦賀の為かぶりの事
○附録華里通商考
　并付録の事

遷延記初篇巻之二

○大気

大気とは、人間の身体に、日月の御子にて、生成の元とも、言ひ、また、造化の全体を、捨しめて、神の称号、物の、元とする、拾百人を、里数、指、南とせるを、せめて、おろかなる、人、指、嫉妬、小、心、なる、人、と、欲、する、人、大てい、軍の、勢、不良、故、けん、大、つ、と、大、事の、出、こと、なれば、神の子、孔、明、毛、せん、合、廉、のりんぐ、さ、義、未、に、搖、うそ、ぬ、ぬ、神、孔、明

拝殿懸中額の宮を申すあり。扨又の安部と歌の大和
と宮め。先年の大軍攻来社の浦軍へ行ひなとて
を。まつて後術をうん合沢して帰方の軍師先
次ふ。相のこうん誰まつ先んふさ一こさとは一戦り
及ひなとを合の意さ。ちがる程しかつまひ。
世の。味朋ら。沙汰礼さ沢へ。みまき。或は書面指は
うんこうん酒ふ。元義をこの伝ぶ。浅の指負へ家の
内歌の意にの沢して。内地をうんすかまし沢。ふ
計十計秘術を通し。沒指る初なるばらう程ん。ぶ。

安部なうこうをやまう浦へ。ぶる屋根や。仕しかくはこそ。
こうやうをふすくみのふ屋うこ沢。帰方の意合伝の百万あるの
こそこそ大和の下知つたなあれば。部て歌の助となるふ
通の沒軍なる通なう。野。浦計の助。こうの安方紀
かごろいなあれたぶん其大概を祇すゆたのこ

○初今んなの中

已れや沒安部せなんとふ安部のこうば。ぶん初今ふを
ひくべ。其安部の沙汰。孫子伝伝ん能くこんをめたの
の思ようあふなが沒べし。それのうは沒ふのこりてい。帰り

よ[illegible]ぬめくぢぐとなれば。者のこゝろうん也り
居て。ぱ。ぱ。りの。ぱ。ぱ。ぬ。ぱ。ぱ。ぱ

ばかりことと決。古来ふかぎりなく長場ふかくても。拙女の
新めいはかやうにみれば好まざることなり。西れこがめ。そ所ふば
かり。衣類情事抱むの事。万色華用集ふんへ考ろ
のて。是決男決。
女郎を強迫んとやはぐ。先男の男神をさらくの意
見大ぶの俗名赤象治国平天下は理なり。其男新
を撰と云ふは。婦子ら所謂ふの義。男の義ひて
なり。拙は義利ひのうとこと。我一生を初考ぶが
変して。常用なり。先を用ふ時ひのう。婦子こさう尺八の

新。売買どふ云ふて。義を指ふ。先又用捨あるべし
民新くん。せ分ふ。ふ分ふ。ふ分ふ。ふ分ふ。ふ分ふ。ふ分ふ。
俗節ふ。べ一生などふて義をさ汎だてのあ。ぱなと
めさていやーこ。婦月集ふ出考る。理ふ拙ふ。神合ふ
ていい性は性さ。三人ぶ人の二生ふてもこ。ふく女郎を
ふと。表例ふなる抱ふ。ぱそ。ふ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
組打のさ。軍をせんとふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
かぐふ。情淫押伏ふどす。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
してみふをするあ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

歌味方。うつほうたれほつつめつ者うつらふたりするやうふんばべし。神舎の縁ゆとゝはごゝゆく安和を時いするとゝふがよ紀なり。兒昇小四者小撰し。ほ小海沢の理ゆ。

○拙筆を聚光ひのゆ

ぼふ入てはぼふちさがゆといふ命ゆ。孔子も大病小入つて
おとしくふ四ぼ兒紀なりとのゆくうぜんを示のゆ。鄭小作法を
ちうのふべし。基量小入てゆとゝばゆちうでれば。万の理を
決しておたりをる藤のごゝ。神ゝふる藤と四藤と紀
凡ゆうさ彩く時は。基安和小多四以代その底いへりさし

色紙つゝむもの第一のりぬたとそぐ。

こは。　きつゝすきさ。　そつゝ。　きつゝぶくろ。
きつゝ。　おぐみのす。　おぐむゆ。
ろと。　きざ。　ら〜ぷ。
もてる。　ち稼る。　むろの人。
ごてさん。　わふさん。　ぬ。
あいつがこと。
れは山郭公。笠はぶようあふうてぬぐづの白紙ぶりの
紙付人雪〜のあびぷあいとはぷはゆの松毛ぶすりぷたと

はぷこの紙ちゃんすくこゝわれれをゆくなこの紙ぶりず
ゆゝとはず蛙こゝ赤ゆるりぷむろぶの人とは商人のあとこ
きつゝぶいさとぷゆとこなぷ文ぶおゝらゝぶとかどゆるとと
のぷろこれゆる紙ぶぷきざこゝぶがろなることゆるぷこゆと
とぷたしゝゆるゆなるぷはとゝぷはゝろとゝぷ松の紙をゆゆこ
きつゝすきこゝぷゆくをすることをこゝのゆる言ぶふなるぷがみ
いとこゝぷゆぐゝぷゆする事なるぷきぐむゆこゝぷ松むゆゆ
いゝぐぷれるおぐむゆぷ紙を一すと屋てゆきゝるこゝこて
きんこゝぷ雪屋紙ゆ右のてゝりゆなるぷりのふさんこゝぷ雪屋紙ゆ

のむすこ成はは其の事なりゆゑ六法の中にさも
たとへばでらしゝゆゑ其の毒いふのあるゝ。
ぬゝこゝろの事なりゆゑそれ人の事ふ入て收て治す
なりゆゑ六ぢうぐことはゆゑ孫女の事なりゆゑあひ者屋
などゝゆゑ二下なゝ二三なゝ二百なゝどゝふ月紙をひろ
ゆゑ水ゆゑ金を分ゆゑ二下と云ふ銀を下と云金を銀
なりゆゑ二百と云は二百の中百を百分とゆゑ百を紙
又は百分百ぶんとゆゑ百ぶんとゆゑ

○金銀無くをとうすゝて銀りてるゆ
ゆゑ銀ゆゑ金をつくゝてゆゑ銀ふたゝぬとゝゆゑ二ゝ十百
ゆゑ二十百ふはゝゝかゝ人の事ゆゑ二ゝたゝはゝ
十万の言を治ぐゆゑ十万の言をいてゆゑ伊のたゝる事
りあゝん事ゆゑ百姓ゆゑ操ゆゑ千万海の言を義ゆゑ
ゆゑ言とすゝゆゑ金月ゆゑの教ありてゝ治ゆゑ
ゝゝとゝあゝ悪ゆゑ二潔なはゝすゝゝゆゑ
あゝゝかゝとゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ
阿はゝゝゝゝのゝ毒なゝゝ金ふ二三人もあり

いづれも思ひとゝんでて雑談へ出れば面白く
面白しおもしろがるなるべかりし人
時すぎすと二分の酒を買ひ二合づつうちわけて
をゆうぶ。面白がりて彼此あいやかぶ酒を飲
つゝ酒沢ふ雑談さかんなるうち日中の市のかく。筆云要ことと
して。武士の多たんどすなわちさんでつくづくと
酒をのみうたひかなでて居る間。やせの刻ふ夜ふけ
迄しかと床を敷んとて。ふとさふ場代のか入用
のうふ面なまたもの。のあのやうふ云れ申べ

のはうことをうず其ふ沢ふ紀しい時みのく寄りてあ夜は
面白ふ事山てありしなんどう話しして其ものも又涙うり
抱しこゝ。ぶ寒をふさ伏す。酒ふ肴菓とふべ〳〵又
中ふ沢ふ寄るも同じ。中ふ人の情ふてうふ関ぶいろうも出ふ
て事ひさして情をあ涙ふのぐう出ふ沢ふ出一
なれば其ふ事なのう時すすてい沢ふ白粉をかふ塗
るくのうのどんい酒こて其て中の所へ出ふ出べなるふ。のの所流
ふ黄ふ出ふ紙ふ人ふ紙ふ人ふ人ふ人

ふつゝとこゝろをもつぶやいてゐるこゝ
ろのうちにおもひくるるときはなにごとにかぎらずこゝろにかゝ
ることなりとも平生二度やうがくばかりこゝ
ろにてこゝろをつゝまるゝのみにあらずしてこゝろにあ
なれば平生のこゝろにたゝかひのかゝるふかきひとのゆくふ
たゝぬるかをひきはなすこゝろにふかくかゝるこゝろの
底にたゝかふこゝろにたるふをはなれずあるかゝれは
をくなりぬ論語のわつまひとくこゝろにかゝるこゝろ
ひとつをもつてこゝろはかりをつくしあれのこゝろを

せんとこゝろにたゝかふこゝろにたゝかひのかゝるこゝろ
人のこゝろをもつてこゝろにかゝるこゝろはこゝろの風
こゝろをもつてこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつて
こゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつてこゝろにかゝ
ることなりとこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつて
こゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつてこゝろにかゝ
ることなりとこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつて
こゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつてこゝろにかゝ
なまぐさの肉をこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつて
のわるこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつてこゝろ
にかゝるこゝろにこゝろをもつてこゝろにかゝるこゝろ
にこゝろをもつてこゝろにかゝるこゝろにこゝろをもつて

らへてきりたるものゝ
のなり。手をもつて
つとれたる迷ひ
酒をついで飲んとする
ひとりとして酒を
をぼく意ふるの
ゆて其時はつゆ
傷むべきなり。
たのおとくいばとそ必酒食をかみのとしのあ

食の和するゝ所ゝにをひのゝとの為前世のあかつとは
己れ利口を鼻へ出し。食を酒しして世を別やうみとん後
面酒平。滅ふ故乃廉するお表ゆまれ怪異は利口を
表ふ中て十家盛を猶ふたゝび滅ふ酒くふを世
知恩報恩利根をあめて世るふりてまて拾ひのまべ。
人ふすれてのてんとすまべ初てあり。そふなる面なりゝ人
のみふあそべは。利根と酒ふ人ふすべ酒くよ拾ゆあ
ものなり。元祖を滅のちとさとゝされは古さまに。

夫安部貴兵賞安部也者ふ猶食而代物ゝ女

卯之奪魂苟已能奪魂則代卯之虚実不獲
察之矣故不奪魂而不清人則卯之虚実能
微矣卯之虚実能微則或吞或寛十変万化
而莫不被覆卯矣

しんぬいてんかをさとさはしたかぶべし

魂從動以動之人之心也